

Seminar Interview

—異文化コミュニケーション研究—
—異文化は身近にある。「当たり前」を疑うと、世界はこんなに面白い！—
教授 profile

花光 里香 (ハナミツ リカ) 准教授
東京都出身。早稲田大学第一文学部卒業。同大学院教育学研究科に学び博士号(学術)取得。中学・高校教員を経験後、早稲田大学教育学部助手、武蔵野美術大学助教授などを経て、2005年より現職。専門は異文化コミュニケーション・応用言語学。主な著書に『ヨーロッパ世界のことばと文化』(共著)、『英語世界のことばと文化』(共著)など。



学生 profile

井上 俊輔 (イノウエ シュンスケ)
大阪府私立追手門学院高等学校卒業。社会科学部3年。
原田 知典 (ハラダ トモノリ)
神奈川県立川和高等学校卒業。社会科学部3年。
鎌田 あゆ子 (カマタ アユコ)
茨城県私立茗溪学園高等学校卒業。社会科学部3年。
平野 未来 (ヒラノ ミク)
静岡県立浜松北高等学校卒業。社会科学部3年。

異文化コミュニケーションとは

花光：異文化コミュニケーションは非常に学際的な分野で、コミュニケーション論、文化人類学、比較文化論、比較文学、社会学、言語学、心理学、教育学、経営学、国際関係論等、幅広い分野に関連して研究のアプローチも様々です。私たちのゼミでは、異なる価値観を持つ人々との円滑なコミュニケーションと相互理解を目指しています。一般的に異文化というと外国の文化を連想しがちですが、「自分と異なるものは全て異文化」という立場で研究に取り組んでもらっています。学生が選ぶテーマは、日本を含む各国文化に関するものに加え、男女や世代の違い、ろう文化、セクシャルマイノリティ等、多岐に渡ります。幅広い分野を網羅している社会科学部で学ぶ学生には、ぴったりの分野ですね。



ゼミナールでは

花光：わたしは「教えない」んです。基本的には学生の自主性に任せて、発見のある授業を一緒につくることを心がけています。学生がほとんどのことを決めるので、学年ごとにゼミの進め方が少しずつ違う

んですよ。共通していることは、毎月の課題図書レポートとサブゼミ活動でしょうか。1人で勉強することに加え、グループでの討論とプレゼンテーション能力を磨くことを大切にしています。1年目は知識を得ることよりも、まずは異文化的な視点を徹底的に身につけてもらいます。サブゼミの課題は「課題発見」。学生がテーマを探し、異文化コミュニケーションという視点から分析を試みます。わたしが新聞、雑誌、映像資料などから選んだテーマについてディスカッションを行う日もあります。異文化は身近に溢れているんですよ。今年度最初に用いる資料は、ワイドショーから作りました。2年目以降は積極的に専門書を読み、卒業論文のテーマを徐々にしぼっていきます。また、海外の大学とテレビ会議システムや、ネット上の仮想空間「セカンドライフ」を通して交流したり、学外から招聘講師をお招きすることも。毎年、異文化に関する活動を広げるとともに、新しいことに挑戦しています。昨年度は、サイクロンの被害に苦しむミャンマーの人々に救援物資を送りました。学生論文集に投稿したことも、よい経験になりましたね。
井上：花光ゼミはみんな役職があるんですよ。合宿係、庶務係、会計係、企画係とか。毎月、誕生会があるんですよ(笑)あとは、先生が学生をみんなあだ名で呼ぶところは花光ゼミだけじゃないでしょうか(笑)

ゼミ合宿

原田：映画を観て、先生が用意したワークシートに沿ってグループで討論したり発表したりします。前は、異文化シミュレーションにも参加しました。
花光：映画は時間的に授業で扱うのが難しいので、合宿でよく使います。前は「ぼくの国、パパの国」というイギリス映画を見てもらいました。この映画には、国、宗教、男女、親子、階級など様々な異文化間の葛藤が描かれているんです。
平野：映画から何かを学ぶんじゃなくて何かを発見するんですよ。
花光：そう、発見することが大切なんです！自分で発見したことはすぐに身につくし、いつまでも忘れません。
鎌田：わたしはこの1年で発見しようとする意識が身につきましたね。授業に限らず、平日頃の視点も変わりました。世の中が違って見えてきますよ。



異文化コミュニケーションとの出会い

原田：1年のときに花光先生の「異文化コミュニケーション論」を履修したんですが、1人で考えるのではなく、みんなでディスカッションする姿勢が楽しかったです。
井上：ぼくも1年のときに花光先生の授業を履修していました。高校の授業って必ず

答えがあるじゃないですか。でもこの授業では、同じテーマでも1人1人が違う“答え”を持っていて、それぞれ違う視点からアプローチしていくんですよ。それがすごく面白くてこのゼミを選びました。
鎌田：わたしはゼミ生の声ですね。ゼミ要項の中で「身近な当たり前を疑うこと、そこから新しい発見が生まれる」って書いてあったんです。わたしにとってはその言葉がすてきに発見だったんです。ここには何かあるぞ、という直感が働きました(笑)
平野：わたしも先生の講義を履修していました。先生の用意する材料はどれもすごく身近なんです。身の回りのことが研究のテーマになるんだ、ってことに気づかされて、ここしかない！と思いました。

ゼミを通じた学生像

花光：過去に様々な学生を見てきましたが、社会科学部の学生は早稲田の中でも個性的ですね。いろんなゼミ生が集まるので楽しいですよ。若いうちから物事にとらわれないで、もっと自由に考え、いろいろなことを発見して感動してほしいです。

社会科学部の魅力は

原田：ぼくは高校のときに何かやりたいと決めていなかったんですけど、社会科学部では自分のサイズで学習内容をデザインできて、自分のやりたいことが見つけられるので、自分に向いてるな、って思います。
平野：軌道修正できるのはいいですね。わたしは入学時は政治経済に興味があったんですけど、いろんな科目を履修していると別の分野に興味を沸いたり、面白いですよ。いろんなチャンスが用意されているんですよ。
花光：強制されると勉強する気がなくなるものですよ。社会科学部のように、自分の興味に合わせて自由に科目を履修できることは大学の最大の魅力だと思います。
原田：そう、社会学は必修科目がないから、ぼくはゼミが履修の起点になっています。異文化コミュニケーションを研究する一つの手法として、経営学や社会学を捉えています。
鎌田：わたしは、ゼミを通して他の講義も多角的な視点で見えるようになって、どんどん面白くなっていきますよ。
花光：社会科学部にはいつまでも個性的であってほしいですね。大学が高校のようになっていく中で、早稲田の中でも「古き良き大学」の部分が一番残っている学部だと思います。

最後に

花光：教員の役割は答えを教えることではなく、自ら学べるような環境を提供すること。大学では自分から求めて課題を発見し、学ぶ力を身につけてほしいと思います。



学部パンフレットより転載